

『姉と巫女舞』

ぼくには、高校生の姉がいます。ぼくが二才の頃から姉は近所の小泉神明社の祭りに参加しています。祭事は、さい旦祭と春祭りの年二回行われます。祭事では巫女装束に身をつつみ浦安の舞を舞っています。毎年秋を過ぎると巫女舞の練習が始まるため、ぼくも幼い頃は母と一緒に神社に通っていた事を思い出します。浦安の舞は神事舞の一つ、「皇紀二千六百年」祝典の際に作られたもので扇の舞と鈴の舞があります。鈴を使う理由は二つあるそうです。一つは、けものや魔物を追い払って身を守る効果。二つ目は、神様を引き寄せる合図です。ほとんどの神社に鈴があり、鳴らしてから願いを唱えるのも同様に神様をお呼びするためということが分かります。

ぼくは、鈴のシャリンという音色が心に響くので、鈴の舞の方が好きです。姿勢正しく堂々と舞う姉達の姿は、ふだんの姉と見ちがえます。練習も大変なのに、なぜ浦安の舞を始めたのか、姉に聞いたことがあります。はじめは、巫女装束にあこがれていたようですが、今は巫女舞が好きで、使命感を持っているそうです。

浦安の「浦」はこころ、「安」は安らぎを意味し、平和をねがうために作られた巫女舞。そのことを知って、毎年取り組んでいるとのことでした。二年前はコロナで祭事が全て中止になり、悲しんでいた姉。今年は例年通り、さい旦祭が行われ、浦安の舞を舞うことが出来て、うれしそうでした。何より神社が明るく感じました。みんなが平和で過ごせる日が続くようにとねがいながら舞っていたと思います。これからは、ぼくも平和をねがいながら、お参りしていきたいと思いました。